

清流

宮沢賢治に寄す

小さな清流の岸辺でゆらゆらと
僕は肺の中の水たまりを揺らしている
鳥みたいにわざと 揺らしている

僕はしゃがんでいるのです、狭い石の上
とぼとぼという音は川原の小石のように
まんまるに転がって行く、水クッションの上

都会の音はいつも角張って鋭くて
あまりに多すぎて、頭は受身で鈍く重く
自分で揺らすことなど思いもよらない

僕は微笑して揺らしている、水を
鳥みたいにわざと 揺らしている
ほのかに嬉しい気がする

(1982.5.12)